

国立劇場養成所案内



我が国の文化的財産である
歌舞伎、文楽、能楽等の
伝統芸能を保存、振興するため、
研修生を募集し、
伝承者の養成に取り組んでいます。

〈国立劇場養成所の概要〉

独立行政法人日本芸術文化振興会は、昭和41年(1966)7月に、我が国古来の伝統芸能の保存及び振興を目的として特殊法人国立劇場として設立され、伝統芸能の公開をはじめ、伝統芸能伝承者の養成、芸能に関する調査研究、記録作成、資料の収集・保存、展示・活用などの事業を実施してきました。平成元年(1989)には現代舞台芸術の振興及び普及に関する業務が、平成2年(1990)には芸術文化振興基金に関する業務が追加されたのを機に、名称も日本芸術文化振興会と改称されました。伝統芸能伝承者の養成については、昭和45年(1970)の歌舞伎俳優をはじめ、以後文楽、歌舞伎音楽(竹本・鳴物・長唄)、大衆芸能(寄席囃子・太神楽)、能楽(三役)、組踊(立方・地方)について、広く一般に門戸を開いて、研修生を募集して養成を行い、研修修了者は各分野において大きな役割を担っています。令和5年(2023)、国立劇場、国立演芸場、国立能楽堂及び国立文楽劇場にて行われている伝統芸能伝承者養成事業を横断的に所管する「国立劇場養成所」を設置し、伝承者の安定的な確保のため、広報活動の強化や養成事業への理解と支援の拡大、研修志望者やその保護者等の安心感・信頼感の醸成を図るための環境整備など、逐次事業の充実を図っています。

国立劇場養成所サポーター 募集中!

国立劇場養成所では、継続的なご寄附によって、研修生の成長をご支援いただく「国立劇場養成所サポーター」を募集しています。いただいたご寄附は、研修用具の購入や修繕、研修発表会の充実のほか、国立劇場養成所における研修・育成のための費用全般に使わせていただきます。皆様からの応援を心よりお待ちしております。



詳しくはこちら

〈お問合せ〉

歌舞伎俳優研修・歌舞伎音楽(竹本・鳴物・長唄)研修 大衆芸能(寄席囃子・太神楽)研修

国立劇場養成所 歌舞伎・大衆芸能研修課

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1 国立オリンピック記念青少年総合センター内 カルチャー棟3階
電話 03(3265)7105 MAIL kokuritsu-boshu@ntj.jac.go.jp

能楽(三役)研修

国立劇場養成所 能楽研修課

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-18-1 国立能楽堂内 電話 03(3423)1483 MAIL nohaku3yaku@ntj.jac.go.jp

文楽研修

国立劇場養成所 文楽研修課

〒542-0073 大阪府大阪市中央区日本橋1-12-10 国立文楽劇場内 電話 06(6212)5529 MAIL bunraku2021@ntj.jac.go.jp

組踊研修

国立劇場おきなわ運営財団 企画制作課養成係

〒901-2122 沖縄県浦添市勢理客4-14-1 電話 098(871)3318

各研修の詳しい情報は、<https://www.ntj.jac.go.jp/training.html> からご覧いただけます。

発行: 独立行政法人日本芸術文化振興会

編集: 国立劇場養成所 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1 国立オリンピック記念青少年総合センター内 カルチャー棟3階 電話 03(3265)7105



独立行政法人日本芸術文化振興会
国立劇場養成所



歌舞伎

かぶき

歌舞伎は、江戸時代の初め頃に「お国」という女性が京で演じた「かぶき踊り」をルーツとします。「かぶき踊り」は、奇抜な格好で常識からはずれた行動に走る「傾き者」という当時の流行を取り入れ、大きな人気を集めました。その後、歌や踊りが中心のものから、筋立てのある演劇的なものへと進展し、舞台芸術として発展・完成しました。今日ではユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に記載されています。

歌舞伎俳優研修

歌舞伎俳優研修は、国立劇場が初めて手がけた伝承者養成事業で、伝統歌舞伎保存会の協力を得て、昭和45年に開始されました。既に多くの研修者が活躍しており、その成果は高く評価されています。

研修課程では、日本舞踊や義太夫、長唄、鳴物等の歌舞伎音楽の習得を基盤として、歌舞伎特有の演技、演出、心などを学び、歌舞伎俳優としての「心と体」作り目標を置いたカリキュラムを実施しています。



歌舞伎音楽(鳴物)研修

鳴物とは、三味線以外の楽器(鼓、太鼓、笛など)の総称です。歌舞伎では、その演奏者(囃子方)が御簾内(下座)という演奏場所で、芝居の儀式的音楽や背景音楽(天候、自然、情景など)を演奏します。また、所作事(舞踊劇)では、舞台上にて長唄と一緒に演奏する出囃子があります。

鳴物研修は、昭和56年に歌舞伎囃子協会、伝統歌舞伎保存会、松竹株式会社との協力を得て開始されました。

研修課程では、小鼓・大鼓・太鼓・大太鼓・笛の演奏法を学び、鳴物演奏者に必要な芸芸や知識を習得します。



歌舞伎音楽(竹本)研修

歌舞伎には、人形浄瑠璃文楽の作品を原作とする演目が多数あり、その演奏にあたる竹本(太夫・三味線)は、歌舞伎の重要な音楽部門の一つです。

竹本研修は、演奏者の高齢化に伴う伝承危機を打開するため、昭和50年に義太夫協会、伝統歌舞伎保存会、松竹株式会社の協力を得て開始されました。

研修課程では、義太夫と三味線の演奏法を学ぶほか、竹本の演出に関わる約束事などを習得します。



歌舞伎音楽(長唄)研修

歌舞伎音楽の長唄は、御簾内(下座)で演奏する黒御簾音楽の一つとして、心理描写や情景などを唄と三味線で表現します。また、所作事(舞踊劇)では、舞台上にて鳴物と一緒に演奏する出囃子があります。

長唄研修は、歌舞伎から独立して演奏される機会の増加による歌舞伎音楽長唄演奏者の減少に伴い、平成11年に歌舞伎長唄協議会、伝統歌舞伎保存会、松竹株式会社の協力を得て開始されました。

研修課程では、長唄や三味線、黒御簾音楽の演奏法を学び、歌舞伎音楽長唄演奏者に必要な芸芸や知識を習得します。



能と狂言は、室町時代に大成した舞台芸術ですが、それ以後、次々と生まれてきた文楽・歌舞伎等に影響を与えつつ、700年近く、現代まで時代をこえて演じつづけてきました。そして今日ではユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」にも記載されています。

能楽(三役)研修

国立能楽堂は、昭和59年に、三役と呼ばれるワキ方、囃子方、狂言方の伝承者養成事業(第一期)を開始しました。各期の募集にあたっては、研修対象とする各役の流儀を特定し、每期それぞれの流儀の指導者による研修を行っています。

ワキ方

能は極めて様式化された芸能で、主役(シテ)は多くの場合、面をつけて舞い、謡うことで人物と物語を表現します。これに対してワキ方は、現実生きてる男性の役で、面はつけません。シテ方の相手役として物語を展開する重要な役割を果たします。研修では、謡・型を中心にワキ方としての芸芸を学ぶとともに、シテ謡や四拍子の基本奏法も履修します。



囃子方

囃子方は、能における笛(能管)・小鼓・大鼓・太鼓の演奏者で、謡・舞の伴奏や登退場音楽の演奏などで曲目を盛り上げることが役割です。四拍子とも呼ばれる各パートは、一人一役に限られ、他の楽器を兼ねることはありません。研修では、専攻楽器を決め、それぞれ現在舞台上で上演されている曲目を履修するとともに、他の楽器の奏法やシテ謡も履修します。



狂言方

狂言方は、日常的な事柄を「笑い」を通して表現するせりふ劇(本狂言)の演者で、その表現は舞と謡の基本を踏まえた見立てを基盤としています。また間(アイ)といった能の曲目の中に登場する場合もあります。研修では、狂言謡・小舞・本狂言・間語などを学ぶとともに、シテ謡や四拍子の基本奏法も履修します。



人形浄瑠璃文楽は、太夫の語りと三味線弾き、人形遣いの三業が心をあわせて一つの舞台を作り上げる総合芸術です。江戸時代初期に大阪で生まれ、いつの時代も変わらぬ人間の情を舞台で表現してきました。今日ではユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に記載されています。

文楽研修

文楽研修は、文楽の芸芸員(太夫・三味線・人形)になるための基礎教育を行うことを目的としています。昭和47年に財団法人文楽協会(現・公益財団法人文楽協会)の協力を得て開始しました。

太夫

太夫は、登場人物すべての台詞・心理・動作などを一人で語り分け、物語を展開していく重要な役割を担っています。専攻課程では、義太夫節独特の発声法や的確な表現の習得をめざして、様々な曲目を履修します。



三味線

文楽では、太棒と呼ばれる三味線を用います。三味線弾きはその太く低い響きにより、浄瑠璃の感情を表現します。専攻課程では、基本奏法の習得に加え、音色で感情を表現することを学んでいきます。



人形

文楽では、一体の人形を主遣い・左遣い・足遣いの三人で操ります。研修では、人形遣いの出発点ともいえる「足遣い」を中心に履修します。専攻課程に入ってから、実際の文楽公演での舞台実習も多くなります。



大衆芸能

たいしゅうげいのう

大衆の娯楽として演じられてきた芸能を大衆芸能(演芸)と呼び、代表的なものに落語、講談、浪曲、漫才、太神楽、奇術、紙切りなどがあります。江戸時代中期、観客を集めてこのような芸能を見せる場所を「寄せ場」と呼ぶようになり、やがて「寄席」と略されるようになりました。現在も寄席や各地のホールで大衆芸能の公演が行われており、多くの人たちが様々な芸能を楽しんでいます。

大衆芸能(寄席囃子)研修

寄席では、落語家等の出演者が舞台(高座)に上がる時や、奇術や曲芸などの披露に合わせて、囃子の演奏がなされます。

寄席囃子研修は、演奏者の高齢化に伴う伝承危機を打開するため、昭和55年に落語協会、落語芸術協会、日本演芸家連合の協力を得て開始されました。

研修課程では、長唄や三味線の技量向上をはかりつつ、数百曲におよぶ寄席囃子の曲、端唄、俗曲、鳴物を習得し、寄席での実習も行います。



大衆芸能(太神楽)研修

太神楽は、神社を祭る式楽や舞楽から生まれた神事芸能が、次第に娯楽色を強め舞台芸能へと発展し、現在の寄席演目となりました。

太神楽研修は、平成7年に太神楽曲芸協会、落語協会、落語芸術協会、日本演芸家連合の協力を得て開始されました。

研修課程では、太神楽曲芸の基本である「立てもの」と「投げもの」を中心に、日本舞踊、長唄、鳴物、囃子など、寄席での活動に必要な芸芸を習得します。



沖縄には多彩な伝統芸能がありますが、組踊もその一つです。組踊は、台詞を中心に、歌(音楽)、踊りで構成された沖縄独特の歌舞劇(演劇)です。中国から琉球王国の新しい国王を任命するためにやってくる冊封使を歓待するため、創作され上演されました。今日ではユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に記載されています。

組踊研修

組踊研修は、伝統組踊保存会の協力を得て平成17年から実施しています。研修は「組踊」の保存継承を図ると共に、将来にわたり興行的かつ定期的な組踊の公演を行う、質の高い優れた若手実演家の育成を目的として、実践的なカリキュラムのもとに行われています。研修期間は3年間で、この間に組踊の代表的な6演目の習得を目指します。

